

107

Newsletter of Japanese Coral Reef Society

日本サンゴ礁学会ニュースレター

2026年2月

contents

日本サンゴ礁学会第28回大会報告

page

2

日本サンゴ礁学会一般公開シンポジウム開催報告

2

学術大会発表賞 受賞者の声

3

自由集会 / 若手交流会 報告

4

学会賞受賞者の声

5

保全・教育普及奨励賞受賞者の声

6

学会からのおしらせ

6



日本サンゴ礁学会第28回大会報告

第28回大会実行委員会 委員長 琉球大学 波利井 佐紀

本学会第28回大会は、沖縄県名護市の名桜大学において、日本共生生物学会第9回大会との合同大会として開催されました。沖縄での開催は7年ぶりとなり、過去最大規模となる約300名の方々にご参加いただき、非常に盛況な会となりました。また、本大会は台湾サンゴ礁学会との連携協定締結後、初の開催ということもあり、台湾から多くの学生や研究者に足をお運びいただきました。大会初日の夜には、市民への還元を目的とした一般公開シンポジウムも併せて実施いたしました。

学術発表においては、一般口頭発表32件、ポスター発表108件が行われ、サンゴ礁研究の最前線に関する活発な議論が交わされました（写真1）。今回は交通の便を考慮し、従来の懇親会に代えてポスター発表の時間を十分に確保し、お茶菓子を囲みながらカジュアルに歓談できる場を設けました（写真2）。ポスター会場は名護湾を一望できる開放的な空間で、沖縄の海を見ながら議論を楽しむ参加者の姿が見られました。また、小中高生やNPOによるポスター発表にも多くの聴講者が集まり、次世代を担う生徒さん達との交流は、印象深いものとなりました。

合同大会記念の基調講演では、東京大学の丸山真一朗教授をお招きし、「サンゴ礁+共生=光共生（但し環境がそれを許すとき、かつそのときに限る）」と題してご講演いただきました。刺胞動物と藻類の複雑かつ魅力的な共生関係について、最新の知見を交えてわかりやすく紹介いただきました。台湾サンゴ礁学会からは学会紹介に加え、2件の台湾の最新研究成果をご報告いただいたほか、2026年には台湾国際サンゴ礁学会が開催予定である旨も共有されました。両学会の今後のさらなる発展が期待されます。

大学院生や若手研究者の奨励については、厳正な審査の結果、口頭・ポスター発表合わせて3名の方々に若手優秀発表賞を授与いたしました。このほか、夜間には2件の自由集会が開催され、深夜まで熱心な議論が続きました。

最終日午前中には、エクスカーションとして琉球大学熱帯生物圏研究センター瀬底研究施設の見学会および若手交流会を開催しました（写真3）。国内外から多数の参加者が施設を視察したほか、若手交流会には合同大会として約47名が参加し、各自の研究紹介を通じて、分野を超えた親睦を深める貴重な機会となりました。

最後に、素晴らしい会場の提供にご尽力くださった名桜大学水山克氏はじめ、円滑な運営にご協力いただいた学会事務局、山下大会理事、そして何より大会を盛り上げてくださった参加者の皆様に、実行委員一同、心より御礼申し上げます。次回、喜界島での大会にて、再び皆様とお会いできることを楽しみにしております。



写真1: 口頭発表の様子



写真2: ポスター発表の様子



写真3: 琉球大学瀬底研究施設でのエクスカーション

日本サンゴ礁学会 一般公開シンポジウム 参加報告

「サンゴの今、サンゴ礁の未来-大規模白化の影響」

2025年11月28日（金）、名桜大学多目的ホールにて公開シンポジウム「サンゴの今、サンゴ礁の未来—大規模白化の影響」が開催されました。約175名が来場し、日英同時通訳も用意されるなど、一般市民の方も参加しやすい形で情報共有が行われました。本シンポジウムは、日本サンゴ礁学会と日本共生生物学会の共催、琉球大学・名桜大学・環境省沖縄奄美自然環境事務所の後援、ザ・テラスネイチャー財団の協賛により実施されました。

冒頭、琉球大学教授の波利井佐紀氏より開会挨拶と講師紹介があり、近年の気候変動に伴う海洋熱波がサンゴ礁に深刻な影響を及ぼしている現状を踏まえ、本シンポジウムの趣旨が説明されました。

第一部では、水中写真家の南條明氏が映像と音楽を用いて、近年の大規模白化の影響とその後の変化を紹介しました。続いて、琉球大学准教授の中村崇氏が、ポケモンに登場する「サニーゴ」の話を皮切りに、サンゴと共生生物の関係や白化のメカニズムを解説し、基礎的理理解を深めました。沖縄科学技術大学院大学（OIST）教授のTimothy Ravasi氏は、白化が他のサンゴ礁生物に及ぼす影響について、火山性CO₂シープの生態系を例に最新の研究成果を報告しました。さらに、琉球大学教授の野澤洋耕氏は、世界と日本におけるサンゴ被度の経年変化を示し、世界的には横ばい傾向にある一方、日本では微増が確認されていることを紹介しました。

第二部では、琉球大学研究員のFrederic Sinniger氏が深度勾配に沿った白化状況と避難地の可能性を紹介し、東京大学教授の安田仁奈氏は温暖化によるサンゴの北上と最北限域での白化事例を報告しました。北海道大学講師の渡邊剛氏は、サンゴの過去から未来を俯瞰し、研究者だけでなく島民やアーティストを含めたサンゴ礁と社会との関わりを論じました。最後に、波利井佐紀氏よりサンゴの回復に関わる産卵と加入の映像^(注1)が紹介され、自然の再生力への理解が深まりました。

山本 将史（東京都立大学）

質疑応答では、多くの参加者から質問が寄せられ、大盛況となりました。内容はオニヒトデやソフトコーラルといった生物に関するものから、マイクロプラスチック問題やサンゴの移植活動、さらには人類として何ができるかといった幅広い視点に及びました。

今回のシンポジウムは、動画や画像を交えた発表が多く、講演陣もストーリー形式で話を展開してくださいり、専門的な内容も親しみやすく理解できました。会場には小さなお子様の姿も見られ、幅広い世代がサンゴ礁の問題に关心を寄せていることを実感しました。私自身、久しぶりの本学会大会参加となりましたが、たいへん勉強になりました。多様な切り口からの発表を聞くことで新たな刺激を受け、やはり現場に足を運び、直接議論に触れる大切さを改めて感じました。今回このような機会を設けていただき、心より感謝申し上げます。

^(注1) 産卵の映像は南條氏より提供



写真：講演者によるパネルディスカッションの様子

学術大会若手発表賞(口頭)受賞者報告

Congratulations!

「大規模白化後のサンゴ礁生態系回復の鍵を握るブダイ類の動態を採餌音から捉える」

木村 ルカ豊 (琉球大学大学院 理工学研究科 海洋環境学専攻)

この度は、最優秀口頭発表賞にご選定いただき、誠に光栄に存じます。

本研究では、2024年夏季に発生した大規模サンゴ白化現象に対するブダイ類の動態を、採餌時に副次的に発せられる音（採餌音）を指標として検証しました。ブダイ類の採餌行動は、藻類の除去や基質改変を通じてサンゴ礁の回復過程に深く関与していますが、行動圏が広いため、従来の目視調査のみでは群集レベルでの長期・連続的な把握が困難でした。そこで本研究では、ブダイ類の採餌音に着目し、受動的音響モニタリングにより、その行動を高時間解像度で捉える手法を用いました。その結果、大規模白化後に藻類優占へと底質組成が大きく変化したサイトでは、ブダイ類の個体数および採餌音が環境変化に即応して増加することが明らかとなりました。これは、搅乱後の環境変化に対するブダイ類の高い行動可塑性を示すものです。これらの結果は、ブダイ類の採餌音が、サンゴ礁の劣化や生態系機能の変化を即時的に捉える新たな指標となり得る可能性を示唆しています。

今後も、生物音響学とサンゴ礁生態学を融合させた研究を通じて、「目では捉えきれない」生態系の動態を可視化し、サンゴ礁生態系の状態変化を高解像度で捉える研究を発展させていきたいと考えております。

本研究の遂行にあたり、多大なるご指導を賜りました指導教員の中村崇先生、ならびに本研究に深く携わっていただいた Rickdane Gomez 氏をはじめとする研究室の皆様に、心より感謝申し上げます。また、本研究は笹川科学研究助成および鈴木祥平海洋生物研究助成の支援を受けて実施されました。この場を借りて、関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。



写真:中野 義勝会長による賞状授与

学術大会若手発表賞(ポスター)受賞者報告

Congratulations!

「サンゴに命を託すアオリイカの研究」

深澤 七星・吉川 瑠璃 (東海大学海洋学部水産学科)



この度は、若手発表賞にご選定いただき、誠にありがとうございます。名誉ある賞を賜り、大変光栄に存じます。

近年、環境変化により沿岸域における海藻・海草の減少が指摘されており、それに伴うアオリイカの産卵床の減少が懸念されています。そうした中、本研究の調査地である高知県大月町西泊地先の海域では、アオリイカが造礁サンゴに卵塊を産み付ける様子が観察されました。この現象についてほとんど先行研究がなく、アオリイカの産卵生態とサンゴ群集の関係性を明らかにすることで、サンゴを保全することは重要な漁業資源であるアオリイカの保全にもつながるのではないかと考えました。そこで、アオリイカの卵塊調査と産卵床となるサンゴ群集の構造調査を行いました。その結果、アオリイカが樹枝状のサンゴ群集内に自ら穴を作り、その穴や隙間に隠すように卵塊を産み付けることが分かりました。さらにその穴を産卵床として再利用するという、新たな産卵生態を明らかにすることができました。

この結果は、アオリイカの資源管理や、アオリイカ漁業を安定的に行っていくための新たな知見となりうると考えています。また、サンゴ保全の重要性だけでなく、サンゴを取り巻く生物や人間社会とのより良い共存の方法を考えるきっかけになればと思います。本研究は単年の結果にはなりますが、この成果がさらなる研究の礎となることを期待しております。

最後に、本研究を進めるにあたり、多大なご指導・ご協力を賜りました公益財団法人黒潮生物研究所の目崎拓真所長をはじめとする関係者の皆様、ならびに中村雅子先生に厚く御礼申し上げます。

「Y字水槽を用いたオニヒトデの嗅覚によるサンゴへの行動パターンの推定」

鎌田 真壽 (東京大学大学院大学院農学生命科学研究科)

この度は日本サンゴ礁学会学術大会若手発表賞（ポスター）にご選定いただき、誠にありがとうございます。

本研究は、“オニヒトデはどのようにサンゴを認識し捕食するのだろうか”という疑問を解決するために、オニヒトデの嗅覚（環境中の化学物質（ケミカルキュ）を受容する感覚）と行動に着目した研究となります。具体的には、Y字水槽（上流が二股に分かれた水槽）を用いて、水槽上流に生きたサンゴの入った容器とサンゴ骨格を入れた容器を設置しました。そして、下流のオニヒトデが、生きたサンゴの匂い情報のみでもサンゴに向かう行動を取るのかを目視及び動画で記録しました。行動の傾向をまとめ、その行動要因をGLMM解析で推定した結果、オニヒトデの産卵時期前に当たる7-8月に、オニヒトデはサンゴの匂いに向かいやすいこと、水温が高いほど実験時に動き回りやすいことが示唆されました。

今回の研究は、2022年10月から今年の7月までの成果をまとめたものとなります。初年度は、オニヒトデがサンゴの匂いよりもサンゴ骨格に多く向かうという予想外の行動が観察され、どう研究を進めたらいいのか悩んだこともあります。そこから、実験系の条件の見直しや工夫、先行研究の調査を重ねながら、1000時間程オニヒトデと向き合う大変貴重な時間を過ごさせていただきました。

指導教員の安田先生、喜多村様、古井戸様、目崎様、黒潮生物研究所及び研究室の皆様等の多大なるご支援があつたからこそ、ここまで研究を行うことができました。この場をお借りして深く御礼申し上げます。発表を聞きに来てくださった皆様も大変ありがとうございました。感謝を忘れず、研究を続けていきたいと思う所存です。



自由集会報告

自由集会①

タイトル：サンゴ礁保全学術委員会企画『変わりゆく自然：サンゴ礁という「場」の保全をめぐって』

オーガナイザー：サンゴ礁保全学術委員会・委員長 藤田喜久（沖縄県立芸術大学） fujitayo @ okigei.ac.jp

2025年11月29日 18:00～19:30の日程にて、サンゴ礁保全学術委員会主催の自由集会『変わりゆく自然：サンゴ礁という「場」の保全をめぐって』が開催されました。今回も、2024年度の自由集会（2024年11月28日、宮崎大学）と同様に、「サンゴ礁保全のバトンを若い世代につなぐ」をテーマにし、サンゴ礁を取り巻く環境がどのように変化してきたかについて具体的なイメージを提供するという趣旨で実施されました。

自由集会では、中井達郎氏（国士館大学）による「サンゴ礁という場の保全をめぐって」、藤田喜久（沖縄県立芸術大学）による「沖縄の自然環境の現状」、長谷川均（国士館大学）による「サンゴ礁海岸の開発と保全」、水山克（名桜大学）による「沖縄島の潮間帯に生息する貝類群集の多様性—1974年と2015年の比較」の4題の話題提供があり、その後、会場参加者らを交えた意見交換の場を持つことができました。例年同様、参加者も多く、大変盛況な会となりました。

前回（2024年）の自由集会と合わせて、これまでのサンゴ礁生態系保全活動を振り返ることができ、現在地を再認識する機会となりました。刻一

刻と変わり続けるサンゴ礁環境の保全について、学会が、保全学術委員会が、（学会員）個人が、今後、どのように取り組むべきか？これからも考え続け、行動し続ける必要があると思います。



写真：自由集会の様子（撮影：水山克）

自由集会②

タイトル：Connectivity and Segregation created by the Kuroshio/ 黒潮が生み出す連結性と隔離性

オーガナイザー：渡邊敦（笹川平和財団海洋政策研究所） a-watanabe @ spf.or.jp

2025年11月30日に開催された自由集会②「黒潮が生み出す連結性と隔離性」は、2024年11月に締結した日本（JCRS）・台湾サンゴ礁学会（TCRS）間の情報共有・人的交流に係る連携協定を受けた具体的なアクションの始動として開催され、多面的な議論が行われました。冒頭で中野義勝JCRS会長とSen-Lin Tang TCRS会長が挨拶し、続いて日本側2名、台湾側2名が講演しました。Huei-Ting Lin教授（国立台湾大学）は底生フラックス解析から、海流による物質輸送がサンゴ礁間の化学的連結性を生む一方、流路構造や現地プロセスが局所的隔離をもたらすと報告しました。齋藤直輝博士（産総研）は数値モデルで黒潮が稚仔分散に形成する回廊と障壁を示し、表層流の変動が種ごとの連結性に複雑な影響を与えることを示しました。Savanna Wenhua Chow博士（中央研究院）はAcroporaの隠ぺい種と東アジアの生物地理構造を報告し、遺伝的分化が地理的連結性と一致しない例を紹介しました。Shashank Keshavmurthy博士（黒潮生物研究所）は高緯度域のサンゴ生理学の重要性を強調し、黒潮帯での生存戦略や地域環境の多様性が連結性を左右すると指摘しました。討論では、黒潮が日本と台湾を繋ぐ一方で、種やライフステージごとの障壁や複雑な連結メカニズムが存在すること、フィリピンやパラオを含む広域での国際連携の必要性、さ

らに気候変動影響評価のため社会科学との協働が重要であることが確認されました。今後は共同研究・モニタリング・データ共有を強化し、2026年6月の高雄でのTaiwan International Symposium on Coral Reefsや2027年6月予定の第6回Asia-Pacific Coral Reef Symposiumなどを活用して、研究連携と発信を推進することが期待されます。



写真：座談会の様子

若手交流会実施報告

担当：古川真央（琉球大学熱帯生物圏研究センター瀬底研究施設）

第28回日本サンゴ礁学会・日本共生生物学会合同大会終了後、琉球大学の瀬底研究施設において、両学会合同の若手交流会を開催しました。本交流会は、分野や所属を越えた若手研究者同士の相互理解と交流を目的として企画されたものです。

午前中には学会主催のプログラムとして、2分間のフラッシュトーク形式による自己紹介兼研究紹介が行われ、約47名の若手研究者が参加しました。限られた時間の中で研究内容や関心を共有することで、その後の交流のきっかけとなる有意義な時間となりました。

午後は瀬底研究施設主催のもと、スノーケリング体験と親睦BBQを実施しました。冬季の沖縄は北風が強く海況が不安定になりがちですが、当日は幸いにも穏やかな風に恵まれ、約26名の参加者が瀬底島北側に残るサンゴ礁を観察することができました。夕方から開催されたBBQには70名以上が参加し、学会の垣根を越えて活発な交流が行われました。参加者からは「またこのような機会があればぜひ参加したい」といった声が多く寄せられました。最後に、本交流会および関連行事にご参加いただいた皆様、ならびに開催にあたり多大なご支援を賜りました両学会および瀬底研究施設の皆様に、心より御礼申し上げます。

mao.furukawa19960722 @ gmail.com



写真：フラッシュトーク形式による自己紹介兼研究紹介。
修士課程からポスドクまでの若手が参加した。

日本サンゴ礁学会 川口奨励賞受賞者報告 / 藤田 和彦 賞委員会委員長

Congratulations!

受賞者：高木 俊幸（東京大学大気海洋研究所） takagi@aori.u-tokyo.ac.jp

受賞タイトル：「サンゴホロビオントにおける細菌機能と病原体制御に関する研究」

授与理由

受賞者は、サンゴホロビオント（サンゴと共生生物で構成される集合体）における細菌機能の開拓と病原体の制御機構の解明をテーマに、従来のサンゴ研究では十分に理解されていなかった微生物群や遺伝子の機能に着目し、細菌が作る色素が白化の原因となる熱・光ストレスを緩和させる効果や、サンゴが作るペプチドが粘液内で病原菌感染を防止する効果があることなど、共同研究者らとともに革新的なアプローチで研究成果を挙げてきました。

受賞者は、先進的な技術を幅広い研究分野に展開してきた姿勢、研究目的や手法において独創性をもった個別の研究論文が多い点、環境脅威に直面するサンゴのレジリアンスや褐虫藻と細菌の相互作用に対する我々の理解を大幅に進展させた点について高く評価されました。

受賞者の多様な研究成果は、今後サンゴの病気の治療やサンゴのストレス評価への応用など多岐にわたる展開が期待されます。

学会員としては広報委員としてニュースレターの編集に積極的にかかわっています。大会では指導学生が若手発表賞を複数回受賞しており、学会及び学会員の研究力向上に貢献しています。

受賞者のあいさつ

この度は、川口奨励賞という名誉ある賞を賜り、心より御礼申し上げます。今回の受賞は、これまでご指導いただいた多くの方々のお力添えによるものです。東京海洋大学の浦野直人先生には、微生物の分離培養技術や研究の楽しさを教えていただきました。京都大学の植田充美先生、研究室の皆様には、切磋琢磨しながらサイエンスを進める姿勢・考え方を学びました。酵母を扱う研究室でありながら、私のサンゴ研究への挑戦を支援し、実験水槽を導入してくださいました。東京大学の井上廣滋先生、新里宙也先生には、分野外から来た私を温かく迎え入れ、自由に研究を進める環境を与えてくださいました。指導学生の中でも、青山華子さんの粘り強さと献身には心から敬意を表します。病原体制御機構に関する成果は、青山さんの努力なくして語れません。そして、共同研究者をはじめ、日頃から研究を支えてくださっているすべての方々に、心より感謝申し上げます。

博士取得の過程でサンゴ研究への挑戦を志した私は、微生物学や遺伝子工学のバックグラウンドを活かし、この領域に取り組みました。近年、サンゴを複合生物が形成するホロビオントとして捉える概念が広がっていることを知り、自身の得意分野を活かして細菌を主軸に研究を展開しました。サンゴにおいて細菌はどのような機能を持つのか、細菌は白化に影響を与えるのか、サンゴはどのように細菌叢を制御しているの

か。こうした問い合わせを軸に研究を進めてきました。私の研究方針は、観察した現象に対して一つの手法に固執せず、多様なアプローチを駆使し、現象の分子メカニズムを明らかにすることです。サンゴ礁は未知の生命現象の宝庫であり、その探求過程で得られる知的好奇心の充足は、他に代えがたい魅力です。一方で、瀬底島南岸のように、美しいサンゴ礁が、気候変動の影響で失われつつある現状に心を痛めています。この賞を励みに、微生物と培養技術を軸にホロビオントの生命現象を解明し、その成果をサンゴ礁保全に活かせるように、研究に一層邁進してまいります。



日本サンゴ礁学会 和文誌 論文賞 報告

Congratulations!

受賞者：小林 雄生（筑波大学大学院地球科学学位プログラム） kobayashi.yusei.tm@alumni.tsukuba.ac.jp

受賞論文：「西表島網取湾北西礁斜面の造礁サンゴ群集の垂直分布」

小林 雄生・村上 智一・伊藤 芳英・下川 信也・山田 吉彦・杉原 薫

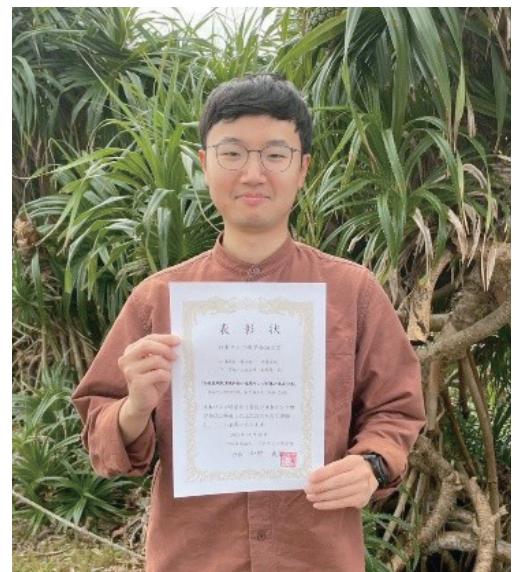
この度は、日本サンゴ礁学会誌論文賞を頂き、大変光栄に思っております。

本論文では、琉球列島の中でも特に多様なサンゴ礁環境が残る西表島網取湾の造礁サンゴ群集を対象に定量分布調査を行い、中深度帯である水深40mまでの礁斜面において、造礁サンゴ群集が明らかな垂直分布パターンを示すことを明らかにしました。実際の調査では、網取湾において定期的に行われているモニタリング調査で撮影されたコドラー写真を活用した被度解析と、網取湾で採取された骨格標本や接写画像等による種同定を主として行いました。本論文ではその結果から群体形と分類群に基づいた群集を定義することで、より明瞭で分かりやすい垂直分布パターンを示すことができたと考えています。

昨今、頻発する造礁サンゴの大規模白化など、地球規模での環境変動によるサンゴ礁生態

系への影響が顕在化しており、継続的なモニタリング調査が多くの地点で行われることが必要になっています。一方、学術的には造礁サンゴの詳細かつ定量的な分布が未解明であったり、造礁サンゴの分類体系がいまだ確立されていなかったりと、調査をする上で十分な知見が整っているとは言えない状況です。今後は、上記のような基礎的な知見がより充実し、継続的なモニタリング調査が学術面からも後押しされる状況が必要だと感じており、本論文もまずはその一助になればと考えています。

最後に、本論文を投稿するに当たりまして、査読、校正と最後まで丁寧に対応していただきました日本サンゴ礁学会誌編集長の中村先生、副編集長の藤村先生には大変お世話になりました。改めて感謝申し上げます。



日本サンゴ礁学会 保全・教育普及奨励賞受賞者報告 /
藤田 喜久 サンゴ礁保全学術委員長、令和7年度 保全・教育普及奨励賞選考委員会 委員長

Congratulations!

活動名：三菱商事国際サンゴ礁保全プロジェクト

活動実施団体：鈴木 款・Casareto Beatriz Estela [✉ suzuki.yoshimi @ shizuoka.ac.jp](mailto:suzuki.yoshimi@shizuoka.ac.jp)

授与理由

2025年度 日本サンゴ礁学会「保全・教育普及奨励賞」は、鈴木 款・Casareto Beatriz Estelaによる“三菱商事国際サンゴ礁保全プロジェクト”に授賞することになった。

本活動は、研究者が大手企業と連携して、市民やNGO等を巻き込みながら、サンゴ礁保全活動の普及に取り組んできた内容であり、サンゴ礁保全分野における産学連携研究の先駆的・独創的なプロジェクトである。特に、20年間もの長期に渡り、企業からサポートを受け続けることができたことは、研究成果の公表や教育活動における参画研究者らの地道な努力があったものと推察され、その後の保全・教育活動にも多大な影響を与えた。また、本プロジェクトの教育普及啓発活動においては、扱いが難しいサンゴを実際に一般市民に扱ってもらしながら研究活動にも参加してもらうことで「研究のプロセス、科学のプロセス」を体験・理解させようとする試みにも注力しており、科学教育的側面からも意義のある活動であると高く評価された。

受賞者のあいさつ

2005年から三菱商事の支援により日本・オーストラリア・セイシェルの3か所で国際サンゴ礁保全プロジェクトは2024年までの20年間継続し、サンゴの白化のメカニズムや環境変動への適応戦略の科学的研究成果の追求に加え、研究者、企業、NGO（アースウォッチ）、市民の協働作業による科学的素養を身に着けるを目標に「市民科学：Citizen Science」を推進してきました。20年間の努力が、「保全・教育普及奨励賞」として学会で評価され受賞できることを大変うれしく思います。サンゴ礁保全を目的として、沖縄のフィールド調査に、過去20年間で総数450人近い市民ボランティアが、研究者、NGO関係者と共に

に参加しました。参加者はフィールド調査と実験室での試料処理やろ過、溶存酸素やpHの測定、サンゴからの褐虫藻の分離と顕微鏡による観察、データのまとめ作業や図の作成に参加し、研究者による解析と説明を通じてサンゴとサンゴ礁についての科学的理解を深め、サンゴ礁保全や環境問題への活動に貢献する

ことを実施してきました。講演会や子どものためのサンゴ教室も毎年丸の内や国立科学博物館で開催してきました。研究面でも高水温下のサンゴ内部で起きているサンゴの白化のメカニズムやサンゴ内部の測定のためのマイクロセンサー技術やサンゴの生存防御のため化学シグナルやホロビオントの研究を実施し、内閣総理大臣賞や国際サンゴ礁学会の2012年の最優秀論文賞等を受賞しました。今後は長い間の研究活動で蓄積した知識や技術を広く普及する活動を進めたいと思います。今後共どうぞ宜しくお願ひします。



写真：琉球大学瀬底研究施設でボランティア参加者と受賞者が実験をしている様子



information

学会からのお知らせ

- ・第29回大会は、2026年に喜界島で開催されることになりました。多くの皆さまのご参加をお待ちしております。
 - ・鈴木款元会長および日高道雄元会長が名誉会員に推薦され、承認されました。
- 教育・研究面のみならず、学会運営を含む長年にわたる本学会への多大なるご貢献、ならびに日本サンゴ礁学会の法人化におけるご尽力に、心より感謝申し上げます。

事務局からの連絡

日頃、円滑な事務局業務にご協力頂きありがとうございます。事務局では、本年、「会員管理システム」の大幅な見直しを検討しております。詳細につきましては、今後会員の皆様にメール等で発信しますので、その際にはご協力頂けますようお願い致します。

広報委員からの連絡

広報委員会では、NLに掲載する記事を随時募集しております。また、広報委員としてお手伝いいただける方も募集しています。話題をお持ちの方、広報委員としてお手伝いいただける方はお近くの広報委員までお知らせください。

編集
後記
Editor's postscript

第28回大会、お疲れ様でした。受賞されたみなさま、おめでとうございます。来年の大会は喜界島で開催されるということで、楽しみにしております！

編集担当：善岡 祐輝